

腥臊、熙朝樂事曰、立春舉酒則縷切粉皮雜以七種生菜供奉筵間、蓋古人辛盤之遺焉耳、四民月令曰、凡立春日食生菜、不過多取迎新之意而已、及進漿粥導酥氣、類腋引王保定撫言曰、安定郡王立春日作五辛盤、以黃柑釀酒謂之洞庭春色、事言要玄引風土記曰、月正元日五薰煉形、注五辛所以發五藏氣、五辛卽大蒜、小蒜、韭菜、雲臺、胡葵是也、

〔隨意錄四〕晉宗懷荆楚歲時記云、正月七日爲人日、以七種菜爲羹云々、又云、正月十五日作豆糜加油膏其上、以祀門戶、先以楊枝插門云々、我方俗所爲皆原乎此與、又云、正月夜多鬼鳥度、家々搥牀打戶、振狗耳滅燈燭以禳之、宗懷按云、玄中記云、此鳥名姑獲、一名天地女、一名隱飛鳥、一名夜行遊女、好取人女子養之、有小兒之家、卽以血點其衣、以爲誌、故世人名爲鬼鳥、荆州彌多、我方俗正月六日夜至七日曉、撲七種菜、以稱呼唐土鳥不度者、蓋亦原乎此也、然起於何時與、未之審也、

〔三養雜記一〕七種のはやし詞、正月七日に、七種の若菜をいはふことは、都鄙ともにするわざなり、六日の夜、七くさをた、くはやし詞に七くさなづな、たうどのとりと、ほんのとりと、わたらぬさきに、といふことは、何のわけとも知らで、ならはしのまゝに、家ごとくに唱ふることなり、桐火桶といふ冊子に、正月七日、七草をた、くに七づ、七度かやうなれば四十九た、くやと、有職の人申けると計なり、これもさびて問申ければ、それまでのことはとて、笑つ、語りたまふ、まづ七くさは七星なり、四十九た、くは、七曜、九曜、廿八宿、五星合せて四十九の星をまつるなり、唐土の鳥と、日本の鳥と、わたらぬ先に、七くさ齋手につみ入て、亢背斗張げに、さりげなきやうにて、物の大事は侍りけりと、いよくあふがれてこそ侍りしかと見えたり、この亢背斗張は、廿八宿の中の四宿にて、いづれも吉方の星宿なり、宿曜經に見えたりさて唐土の鳥といふは、證とするほどのものにはあらねど、七草冊子といふものに、須彌の南にはくが鳥といふ鳥あり、かの鳥の長生をすること八千年なり、此鳥春のはじめ毎に、七色の草をあつめてふくするゆるに長生をするなり、